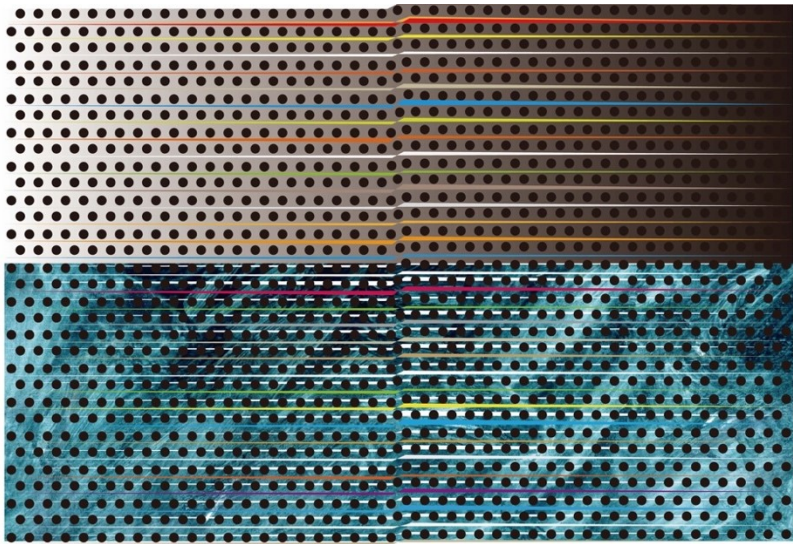


詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第 24 号  
2023 年 9 月



目次

伊東友乃

空っぽで 2

ゼロのような春の日 4

くりかえし 6

夕暮れのハレーション 8

多摩川原橋（たまがわらばし）にて

単純なこと 12 10

鼓動 13

憂鬱 14

満月 16

ヘッドフォン 17

ラベンダー 18

焼き魚 20

仮面 21

ソネット 3 篇…ひまわりとの対話

22

関根全宏

瀧澤愛美

清水みほ

永松佑香

渡辺信二

表紙原画

鈴木順三

「記憶の段差 1」（表紙）

「記憶の段差 2」（裏表紙）

空っぽで

伊東友乃

死を意識したとき  
あまりにおのれの宇宙のちいささに  
おどろく

このからだはまだ大きすぎて  
林檎ひとつぶんくらいいのちのちが  
からから揺れて  
プラスチックの音に似ている

たぶんそれを開けても  
空っぽだろう

純正なる何かきらきらしたものを期待しても

空っぽで

いったい何に生かされてきたのだろうと

おどろきながら わたし  
いつか死ぬのだろう

ゼロのような春の日

伊東友乃

もはや悲しみなんてゼロのような春の日を

眠たく見あげれば

歩いていたひとびとの残骸が

波となり

ビル群のあいまの

空から押しよせる

生きようとした

吐息のような想いらは

淡く散りつづけ

気温はすこし上昇する

まだ死者たちの想いが

おだやかなのは春だからで

よみがえるのも春だからで

虫も樹もみんな  
しめっぽい土が温まるのを待っていた

くりかえし

伊東友乃

緑の稲穂がいつせいに大地から  
たちあがるとき

わたしは何度もこのいのちの時間を  
くりかえしてきたように思う  
いつだって

ちいさく生まれて　そして散るために  
まだ見ぬ黄金の季節に焦がれて  
いのちの質量をふくらました

それから　ひかり輝く日に  
ぼろぼろ　落ちてゆき

また水辺に根づき  
やわらかな風にそよぐ　という  
イメージが

実際に起きたことなのか



それはただ 焦がれるあまり  
くりかえし見続けている夢なのか

わからなくて

「稲穂も 波のようにごめく景色にも  
いつまでたっても触れないまま

またくりかえす

夕暮れのハレーション

関根全宏

葉を茂らせた樹木の向こうで

七月の太陽は

冷静を装う

乾いた庭で

行き先を失った果実の種が

掬われることなく

大地は歪むというのに

それでも薄暗い台所で

夏野菜が茹でられ

玄米が炊かれる

骨と肉

顔と顔

視線が陰るその顔には

カタルシスなどないというのに

それでも夜になれば  
死者と戯れる  
今はただ  
魚が焼かれた  
良い匂いがする

多摩川原橋（たまがわらばし）にて

関根全宏

乱れた息を整える

雲が薄く広がり

集合住宅の明かりが

兩岸に灯る

川面に反射する

揺れて黒く光る

車のライトがゆっくり動く

血が流れる

左手の土手の暗がり

昼間の野球少年の影が動く

白い球が風をきる

身体が静止する

血が騒ぐ

人が蠢く

死者を模して

戯れを幻視する

京王相模原線の下り列車が

ゆつくりと川を渡る

その上に月が浮かぶ

空は広い

銀河は見えないが

きれいな夜だ

今日の月も

あの日の太陽に繋がっている

## 単純なこと

関根全宏

すべてがうまくいかなかった  
そのことばかりを考えて  
仕方なくバスを降りた  
ぼくを降ろしたバスは  
まだ人をたくさん乗せたまま  
なにこともなかったかのように  
停留所を出て行った  
それぞれの暮らしに戻る  
そんなに複雑なことではない  
ぼくは今日も  
明かりが消えた家に帰る

## 鼓動

瀧澤愛美

生まれた時に刻まれる  
鼓動の数を誰もが持っている  
どんなにいい人であっても  
それを変えることはできない  
どれだけ懇願しても  
その数が増えることはない  
赤くて、重くて、繊細で、  
生温かく全身に響かせながら  
時が流れるのをじっと待っている  
終わりが見える頃には  
寂しいくらいに  
脆い音が消えていく  
予測不可能だけど  
確実にあるその時まで  
鼓動は鳴り続ける

憂鬱

瀧澤愛美

冷たいガラスの向こうから  
薄暗い音が聞こえて  
私を夢の世界から引き離す  
望んでいない朝  
そう思いながら  
体温が奪われていく

結晶になりきれず  
私の気力をかき消そうと  
必死に空から落ちてくる  
傘で一時的に凌いでも  
さらに鈍い破裂音が  
体を重くする

靴に染みた水滴の跡が  
消えることはない



地面に映った歪んだ私

躊躇なく踏みつけ

素知らぬ顔で歩き続ける

本心を気づかせないように

満月

瀧澤愛美

私に呼びかける

何もない暗闇を明るくするそれは

久しぶりに姿を現した

視力の悪い目には

本当の大きさが映らない

ただ眺めていると

私の心を躍らせるように

心地よい光で見つめ返して

眠りに落ちる瞬間を与えない

無言の時間が過ぎてから

それは忽然と現れた雲に姿を隠して

そのまま出てこなかった

暗い夜の中で

まだ微かに気配はあるのに

私はまた会えることを期待している

ヘッドフォン

清水みほ

14の僕は怯えている

小さな僕に突き刺さったトゲは

あまりにも深く鋭く多数で抜けない

他者承認されるべく

自分を偽り

目に怯え

声に怯える

21の僕はそつと僕にヘッドフォンをする

ほら、もう僕の声僕の音楽だけを聴けば良い

今の僕ならそう言っただけであげられる

そんな気がするんだ

ラベンダー

清水みほ

夏が近づく夕暮れの噴水公園

彼がギターを抱えそつと芝に座る

ギターを弾く彼はいつもより大人に見えた

不器用な彼が選んだその曲は

あまりにも不器用で

あまりにも愛しい

不器用な表情のまま弾き始めたその曲は

彼が私にくれた数少ない褒め言葉で

言葉にするのが苦手な彼だから

そんな彼が選んだ曲をどう捉えれば良いか分からなくて

気にしないふりをしながらそつと口ずさむ

彼のラベンダーが私だったらしいな

そう思いながら彼をそつと見つめる

ふとその曲が流れると

あつという間に夕暮れの噴水公園で

今となつては彼との思い出の曲

私の心をきゅつとさせる彼の曲

彼も同じだったらしいな、

なんでもなかったその曲は

なんでもある曲として

私のプレイリストにインストールされた

焼き魚

清水みほ

小さな私には分からなかった  
今日の朝食は焼き魚か、  
骨があるしあの見た目  
食欲そそらないよなあ

焼き魚の匂いで目覚める  
そんな日曜日

あ、今日は焼き魚か  
意外と手間な焼き魚

旬の魚を選ぶのは母の優しさ  
私の四季は母の手間

## 仮面

永松佑香

同じ仮面を付けた人たちが通り過ぎてゆく  
顔を化けさせて前を向いて歩いてゆく  
愛想振り撒き、八方美人

同じ仮面を付けた人たちがそれを外して  
素顔を隠して下を向いて走って行く  
醜態晒して、自己嫌悪

仮面を付けたたり、外したり  
自分を取り繕うのに皆必死  
疲労を披露して意気消沈

躊躇いなく仮面を剥がせたら  
そこがあなたの居場所なのだろう

さて、僕も仮面を外してみるか。

ソネット3篇…ひまわりとの対話

渡辺信二

1

なぜ おまえは 詩を書くのか

おまえは 詩人と名乗ったことがなく

また 詩人と呼ばれたこともない

それでもなぜ おまえは

詩を書き続けるのか

そう ひまわり が尋ねる

模範回答――

それは 良く死ぬため です

与えられた命を全うし

生を生とするために

ぼくには 詩が必要だった

これからも 詩がぼくの

生を支えるのでしよう

たとえ 未完で中断するにしろ



2

あの頃 望んでいたのは  
ひまわりの短い葉柄となり  
葉の一部として 葉を支えること  
そして 葉を養うこと

根の圧を頼りにして  
からだの中をさわさわと  
葉液が流れる  
わたしは それを感じる

葉の喜びも 夜へと続き  
星のささやきとともに  
朝まで 揺れ続ける  
何の不安も心配もなく無く

まるで 時が 生命の源泉に  
吸い込まれるように

この頃よく思い出すのは  
暗く暖かい土の中に  
じつと息をひそめていた小さい頃のこと

あれが夢だと知っているけれど  
でも 憧れが強くて

わたしは 秋ごとに ひまわりの種になり

じぶんでじぶんの重さを量り  
落ちるべき場所を選んで  
一冬を越した

春には 太陽を求めて 芽を出す  
それが 蘇り でした  
たとえすぐに 鳥に啄まれようとも・・・

わたしは 今 小さい頃に戻りたいと  
願うほどに 年老いた

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602

東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

2023年2月1日から2023年7月31日までに贈られた詩誌等一覧  
詩誌

『コールサック』113号、114号。

『白亜紀』165号、166号。

『万河・Banga』29号。

『りんごの木』63号。

『GATE』35号。

『銀曜日』53号。

月刊『ココア共和国』2023年4月号、2023年8月号。

詩集

高橋宗司『芭蕉の背中』コールサック社、2023年。

藤田博『億万の聖霊よ』コールサック社、2023年。

千石英世『鬼は来る』七月堂、2023年。

塚本敏雄『さみしいファントム』思潮社、2023年。

松本高直『クラインの壺』コールサック社、2023年。

ふじもとまさき『ひ・と・り・ご・と』私家版、2023年。

その他書籍・論文・エッセイなど

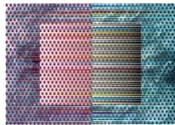
チャールズ・ラム『エリア随筆抄』南條竹則編訳、岩波文庫、2022年。

海老澤豊『諧謔の精神：英国十八世紀のバーレスク詩を読む』音羽書房鶴見書店、2023年。

富山英俊『比喩と反語：アメリカの詩と批評』せりか書房、2023年。

平野順雄ほか編『四月はいちばん残酷な月：T.S.エリオット『荒地』発表100周年記念論集』水声社、2022年。

巽孝之監修『アメリカ文学と大統領：文学史と文化史』南雲堂、2023年。



詩誌『立彩』第24号 2023年9月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社DTP 出版 TEL 03-5621-4531